



# 九州体育・保健体育ネットワーク研究会2017 ファイナルin福岡

—21世紀の資質・能力育成と保健体育の授業の可能性—

2017. 2. 25 (SAT) アクション福岡



九州各県の体育科・保健体育科教育に関わる有志が、新学習指導要領への理解、体育学習や保健学習に関する授業力の向上、教育課程編成等体育科教育の充実に向けてディスカッションし、九州から全国へ実践ベースの情報を発信するとともに、全国体育・保健体育ネットワーク研究会の交流を深めるという目的でスタートした本研究会も2017で7年目を迎えることになりました。今やこのネットワークも、北は北海道、南は沖縄に広がり、「北と南から日本をサンドウィッチ」の合言葉に変わりました。

2月25日(土)には、福岡県立スポーツ科学情報センター(アクション福岡)にて、北海道から沖縄、今回は台湾から総勢150名が参加していただき、6回目のファイナルラウンドを開くことができました。本当に開催に携われたすべての方々に感謝いたします。

## 1 はじめに

桐蔭横浜大学教授 佐藤先生より、本ネットワーク研究会の変遷についてお話がありました。2011年、九州各県で8回のラウンド開催、研究会登録者320名からスタートし、2016年現在、107回のラウンド開催、4027名の登録に至るなど、この6年間でラウンド開催は全国に広がり、体育・保健体育教育に携わる有志の輪は拡大してきています。

また、昨年4月に発生した熊本大地震。グラウンドや体育館で運動や授業ができない状況へのタブレットPCや授業支援等、ネットワーク研究会としても、できる限りの熊本支援をしてきました。その支援に対し、熊本県の香山先生を代表とする先生方がお礼に駆けつけてくれました。

まだまだ、東日本大震災、熊本大地震の復興は道半ばの状態です。子どもたちの伸び伸びと運動する姿や元気に走り回る健康な姿を求め頑張っていきましょう。



## 2 第1部「授業づくり最前線」学習指導要領に基づく指導の推進と実践

予定では、まず「中央教育審議会の動向と体育・保健体育」について、国立教育政策研究所 教育課程調査官の高橋修一先生にお話をさせていただく予定でしたが、諸事情によりできなくなり、国研研究指定校からの発表やグループ協議を充実させることにしました。今まではファイナルRはスクール形式でしたが、今回は通常Rと同様にグループでの協議をする形式を採用しました。やはりアクティブラーニングですね。

那覇市立小祿中学校、香椎高等学校、大村工業高校の3校の研究指定校からの発表がありました。小祿中学校は2年間の研究のまとめの発表、香椎・大村工業高校は研究1年目の中間発表でした。

### (1) 沖縄県那覇市立小祿中学校

思考力・判断力等の育成に向けた学習指導と学習カード等の工夫改善、他者との学び合いを通して言語活動の充実をいかに図るかという研究です。体育分野の「体づくり運動」と保健分野の「心の健康」を連携して、様々な角度から自分の健康へアプローチさせられていました。また、「ハードル走」でのルーブリックの作成、「サッカー」での課題解決のためのICT利活用等も大変興味深いものでした。

この図表は、研究テーマ「第1学年 保健分野「欲求やストレスへの対処と心の健康」」に関する実践の取組を詳しく説明しています。中心には「自分にとってのストレスへの対処の仕方」と「心」と「体」の関係が示されています。実践のポイントは、仲間と共にブレインストーミングを行い、様々な対処の仕方と心の関わりを明らかにし、自分にとって合ったストレスへの対処の仕方について説明することです。また、授業でやった体ほくしの運動はたくさん動いて楽しかった。だから体ほくしの運動が合うと思うという生徒の感想も紹介されています。

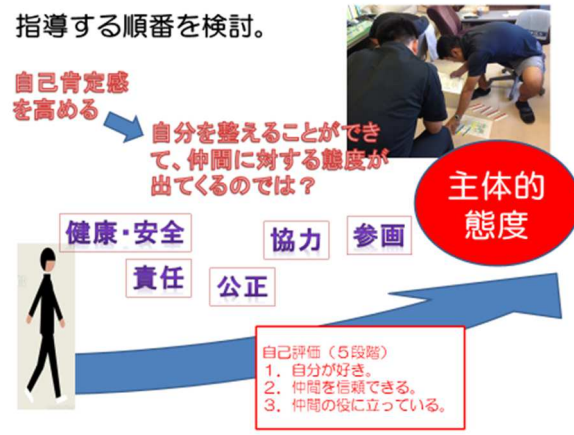
## (2) 福岡県立香椎高等学校

生徒が主体的に学習活動に取り組みするために、観点別評価における思考・判断を中心とした指導と評価についての研究です。運動のコツがわかる教具の工夫で、「なぜこうなるのだろう」「どうしたらうまくいくだろう」と自ら問いをもって活動し、自ら課題を解決できたこと、話し合いなどの学習形態の工夫によって、思考力・判断力等が高まったことなど、研究1年目ですが成果が出ていました。また、生徒に事前に示す評価規準を生徒の課題解決の手がかりとなるように設定したことで、生徒も身につけなければならない学習内容がより明確にできたようです。

## (3) 長崎県立大村工業高校

育成すべき資質・能力の習得を目指した指導方法の工夫改善を態度の指導から研究するものです。単元の構造図を作成し、学習内容と学習指導要領、評価がどのように結びついているかの理解を深められた。態度が身に付いている姿とはどのようなものなのか、その生徒の姿の例を多く収集すること、関心・意欲について、観察のみでは見取ることができないため、学習カードと発問の工夫すること、生徒の自己評価（「自分のことが好き。」「仲間を信頼している。」「仲間の役に立っている。」について5段階評価）と教師の観察による評価との比較を行うことなど、態度形成の指導の工夫やその評価、見取り方の工夫については、これからの研究が楽しみです。

### (2) 練習方法の工夫 科目「体育」



## 2 第2部 ポスターセッション・ブース展示 教育・行政・研究の情報共有



全国各県の先生方、指導主事の先生方、鹿屋体育大学・九州共立大学の大学生、今年は台湾師範大学 チンウエイ・チャン先生率いる台湾の大学生から 23 本のポスター発表がありました。授業の工夫から運動部活動の在り方、総合型スポーツクラブとの連携、企業と自治体とのタイアップ、全国学体研の報告など様々なジャンルの内容に、参加者も熱く語り合っていました。

展示ブースには、剣道簡易竹刀の開発、JADA スポーツの価値教育情報コーナー、体づくり運動アプリタブレット体験、九州体育・保健体育ネットワーク資料室の資料や各県の資料展示などあり、たくさんの情報公開に皆さん興味津々でした。



### 3 第3部「保健体育授業づくりシンポジウム」

～資質・能力の育成と体育授業からみたスポーツの貢献～

北海道教育大学名誉教授 古川 善夫先生、名古屋市立高蔵小学校校長 伊藤 久仁先生、安田女子大学教授 徳永 隆治先生をパネリストにお迎えし、佐藤先生のコーディネートでシンポジウムを行いました。

#### (1) 「身体を通して学ぶ資質・能力」 北海道教育大学名誉教授 古川 善夫先生

体づくり運動で期待される資質・能力

①何を理解しているか、何ができるか？  
体づくり運動の意義、運動の行い方や選んで組み合わせること。  
評価基準 単元構造図

②理解していること・できることをどう使うか？  
生活の中で計画して取り組むこと。  
活用シート(運動時間) 身体活動水準(メッツ・時)

③どのように社会・世界とかかわり、より良い生活を送るか？  
学校行事、地域行事に積極的、自主的、主体的に参加すること  
親子チャレンジ Gチャレンジ

□ 現代的な諸課題  
①健康・安全・食に関する力  
⑥豊かなスポーツライフ



体づくり運動の意義、運動の行い方や選んで組み合わせることを理解することで、いかに生活の中で計画して取り組むかを考えること、それを、どのように社会・世界と関わりやより良い生活を送れるようにするのが、「体づくり運動」で期待できる資質・能力ではないかと話されました。

そのためには、児童生徒の発達の段階を踏まえて、学習したことを実生活や実社会に生かし、豊かなスポーツライフを継続することができるよう、小学校、中学校、高等学校を通じて、系統性のある指導が必要であることも熱く語られました。

#### (2) 「小中の接続の視点からみた体育・保健体育授業の貢献」 名古屋市立高蔵小学校校長 伊藤 久仁先生

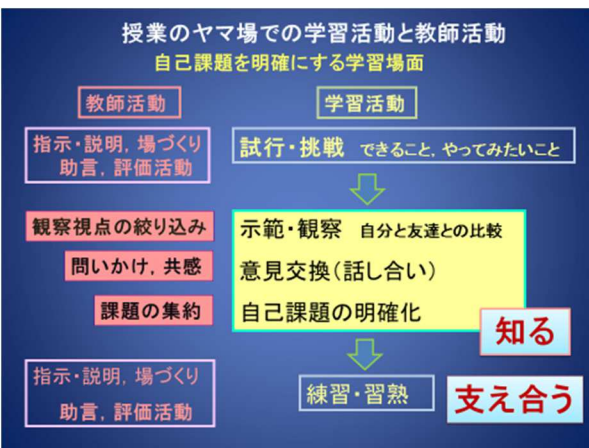
見方・考え方

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点からとらえ、自己の適性等に応じた

**「する・みる・支える・知る」**  
の多様な関わり方と関連づけること

学習活動の中に話し合い活動やグループ学習を取り込めばアクティブラーニングになっているという考え方はなく、子どもたちの脳がフル活動させる場面をいかに作り出すかがアクティブラーニングであること、既習事項を使っていくことで学習が広がり、深い学びにつながることで、根幹となる知識をしっかりと見つけ理解させることにより、思考・判断、技能、態度の観点に広がっていくこと、また、次期学習指導要領でいわれている「見方・考え方」では、「する・みる・支える・知る」という体育・スポーツの大きな目的が、すべての教育の基盤になるものではないかと語られました。

#### (3) 「小学校から考える「する、みる、支える、知る」スポーツ」 安田女子大学教授 徳永 隆治先生



運動好きの子どもたちを育てるためには、体育の見方・考え方である「する・みる・支える・知る」の多様な観点から体育の授業づくりを考える必要があること、特に、行い方を知ることが大切であると話されました。また、この行い方を子どもたちに身につけさせるための教師の発問や観察等の視点の絞り込み方が重要になり、子どもたちが、行い方のポイントを自ら見つけたと感じ取らせる教師が仕込みや共感が大切になると語られました。教師が、教えたことを子どもの学びたいことにするために、子ども自身が自己課題を明確に持った学習が必要になり、それができれば、主体的で協働的な深い学びにつながると語られました。

#### (4)まとめ

今回の中教審の答申の中で「する・みる・支える」に「知る」が入ってきた。体育にどうして「知る」が入ってきたかという、今までも体育理論等で「調べる」という内容はあり、今回の改訂で改めて考えた時に、「する」にも「知る」があり、「みる」にも、「支える」にも「知る」があることが表に出てきたということになります。しかし、する、みる、支えると知るが並列かというそうではなく、オリンピック・パラリンピック教育を受け、スポーツをしない人へのメッセージではないかと考えます。



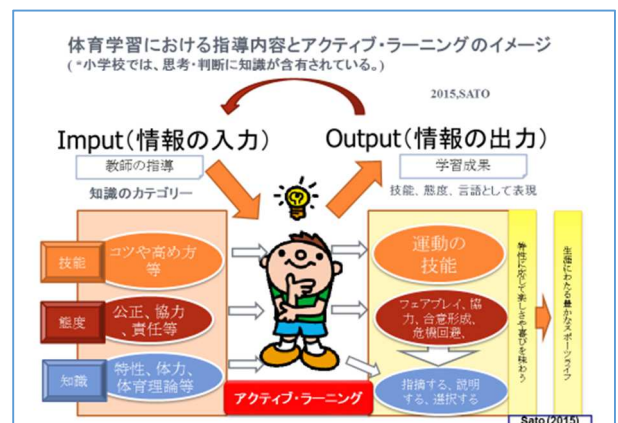
今、体育における資質・能力と考えたときに、体育・スポーツ好き側にいる人ではなく、スポーツが比較的苦手であるという人たちに向けて、豊かなスポーツライフへの一つの切り口として「知る」というものの重要になってくるものと考えます。このことが、スポーツの意義とか価値につながっていくことでしょう。

また、今回、「知識」を「内容知」と「方法知」に分け中教審で示されている。運動する行為そのものが方法知であり、教員側から見て教えるメソッドとしてその運動ができるようにする授業の仕掛けが方法知であると考えます。例えば、「体づくり運動」でいえば運動の要素が内容知であり、具体的に取り上げるものが方法知になるのです。どちらかが弱いと充実した習得につながらず、内容知と方法知を関連付けて指導する重要になると思います。このことは、今後のラウンドの中で共有していければいいと考えます。

次に、保健と体育というものは、体育理論を含めるとかなり相関を示しています。体ほぐし運動と心の健康や応急手当と水泳、ほかにも体育の健康・安全の態度内容と保健の内容はたくさんあります。單元ごとのねらいに応じてしっかりと指導しつつ、保健の内容を意識しながら授業を組み立てることが、この関連性や意識付けが進むものと考えます。カリキュラムマネジメントの視点からも、年間指導計画の中で様々な学習活動と関連性を図ることで、より効果的な指導につながるものでしょう。

最後に、知識には、態度の基となる知識、技能の基となる知識、動きの基となる知識、そのほかにそれぞれにカテゴリ化された特性などがあります。この知識を子どもたちの脳をゆさぶって、運動として表出されたものが身体表現になるものが技能であり、態度の表出されるものが関心・意欲・態度で評価していくものであり、思考・判断・表現は何かと考えたときに、主に言語、文章で表出してきたものと整理できます。

このように考えてみると今回の学習指導要領の改訂で、思考・判断に表現が、知識と技能と一緒にカテゴリ化されたことにも対応がしやすいと思います。この評価については、今後、研究の進むにつれてははっきりしていくものでしょう。



#### 〇あとがき

これからも、新たな開催地や独自のラウンド開催の広がり、体育・保健体育を通したスポーツの価値を高めたいという志をもった多くの方々とのネットワークの広がりや実践が地域を越えて結びつくことが何よりの財産であり、ネットワークでの繋がりに感謝します。来年度も3月上旬に、ここアクション福岡でファイナルラウンドを開催します。通常Rも行いますのでHP等でご確認ください。すべては子どもたちのために…。  
「北と南から日本をサンドウィッチ、日本はひとつです！」 (文責 福井宏和)